

---

# ブラックリストハンターとオハラが悪魔

あと風よけと...！！ ソファーと...！！

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブラックリストハンターとオハラが悪魔

### 【Nコード】

N4332V

### 【作者名】

あと風よけと…！！ ソファーと…！！

### 【あらすじ】

ブラックリストハンターがワンピースの世界へ。

主人公はハンター×ハンターの世界の住人で転生者ではないし、原作知識ありません。ただ、念能力者ではありません。

原作8年前のロビンと出会ったところから始まります。

グランドライン編始まりました。

## 異界送り×逃亡×出会い

迂闊。

その一言に限った。オーラを纏ったピンクの扉に不用意に触れた瞬間、俺はそこにいた。

…薄暗い。

数秒で目がなれると、ゴツゴツとした岩壁が見える。

横幅は10m、奥行き…暗くて奥まで見えないが、40mくらいかある程度進んだら曲がっているのだろう。高さは15m以上…オーラを込めてジャンプしたら余裕で届くが…この場所で飛ぶことは不要だ。

そして後ろを振り向くとそこは、磯の香りと波の音。差し込む月の光。

海岸沿いの洞窟いるのだろう。

それより、気になるのは習慣から瞬間的に行った円が認識した数十人の人間。距離は80mぐらい離れている。80か…今のコンディションはよくないな…。

そして一人がこちらに向かい、そいつを残りのやつらが追いかけている…そうだった構図だ。

「熱烈なファンに追いかけられる、人魚の歌姫とかだったり…」

ファンタジーなことを言ってみた。

現実には幻獣・魔獣はいても絵本に出てくる可愛らしい、あるいは美しい人魚などいるはずがない。

というか、海〃人魚の発想…俺はどうした？

やはり、念能力でアイジエン大陸の内陸部からどこかの海岸沿いに飛ばされて混乱しているのだろうか。

あるいは最近、賞金首を追い掛け回していて女っ気がないからか…。

まっ！

そんなことより、ええ！ そんなことより、近づいて来る気配に対して行動しなければならぬ。

言葉や、服装からある程度どこの地域の人間から判断できるから、ここから移動せず、今から来る人間をみて現状把握をしよう。

発…おれの能力を発動させて天井に。

オーラ使って飛ぶと、頭から突き刺さりそうだからな！。

洞窟に突き刺さって、ぶら下がる俺…。俺じゃなくてもシニールすぎる。

これから来る人に、そんな痴態を見せる必要性を感じられない。能力をきり、絶を行い、適当な凹凸に手足をひっかけ待機する。

…人魚姫がきたらどうしよう。

うん。ちでるか質問してみるか。

■

「はあ…、はあ…」

私はこの薄暗い、洞窟を走り抜けている。

洞窟に海水が入りこみ、足がとられる。

私は能力者だから、余計つらい。

この洞窟をアジトとする海賊を隠れ蓑にしていたが、潮時だと思い逃亡したのだ。

それは向こうと同じで、私をやっかいばらいしようとしたのが今晚。そして、今にいたる。

「まちやがれ！ この疫病神！」

巨体を揺らしながら私を追いかけてくる人間がこの海賊団の船長だ。彼の能力と私の能力は相性が最悪だ。

対人に関して圧倒する、私の能力が聞かない。

そのため闘うという選択肢はなかった。

「っう！」

風切り音と共に私のふくらはぎに、何かが刺さり、私は受身もできずに転がる。

その様子をニヤニヤとした表情を浮かべた船長と、部下が近づいてくる。

「どうした？　綺麗な姿が台無しだな。これから俺たちを楽しませる予定がお前にはあるんだ。女の化粧は時間がかかるからな、これ以上手間をかけさせないでくれ」

「相変わらず考えていることは獣と大差ないわね」

この状況下では、ただの強がりなのは明らかだった。

「お前の能力は厄介だからな、お楽しみの前にある程度、痛めつけておく。おい…」

部下達に指示をするが部下からの反応はない。  
男が怪訝に思い、振り返るのと同じだった。  
金属音が洞窟に反響するのは。

■

女から意識を逸らしたとたん、俺の体は切りつけられていた。

「な、なんだ!？」

辺りを見渡すと敵の姿は無く。

倒れた部下達がいた。

数秒前までは立っていた数十人の部下を一瞬で倒す敵がいる!

俺は能力を発動させた。

体中から鉄製の針が噴出する。

「ぬはははっ! 俺はハリハリの実を食った、全身ハリ人間。鉄製のハリで守られる俺の体は鍛えられた拳も、どんな刀でも傷つけることはできないのだ!」

俺の邪魔をする人間はこのハリで顔も体も突き刺してきた! ずばやい鼠程度では勝てることはできんだ!

「うぬっ!」

強い風を感じた。

小賢しい真似だ! 攻撃にしてはぬるすぎる!!

「…大丈夫か?」

そんな言葉が聞こえた方向に顔を向ける。

疫病神の女の側には男がいた。

暗くて見えないが、身長は疫病神の女より高く、以前みたワノ国の侍に似た服装をし、腰には鞘に収められた刀がぶら下がっていた。俺がいるのに刀を抜いていない！

「貴様！ 俺…を、あ…？」

攻撃をしようと体を動かした。

その時、俺の意識は途絶えていった。

■

「…大丈夫か？」

突如現れた男が心配そうに私を覗き込んでいた。

その顔は少年のようで、青年のようで…けれど引き締まった“男”を感じさせた。

体を抱きあげられ、海水が浸からない場所に移動される。

そして慣れた手つきで足の怪我の治療を私に施す。

「あなた、一体…」

この質問は色々な質問が含まれていた。  
どうしてここにいるのか、どうやってあの男達を倒したのか、そして…どうして私を助けたのか。

「俺はブラックリストハンターのアルディー・ワンカーズ。人魚姫を海賊から助けようと思ってな」

「人魚姫…？」

ポカンとした顔して聞き返してしまった。

私の反応に、少し顔を赤くする彼が面白くて、“ブラックリスト・ハンター”という言葉もついさっきの疑問も今はどうでもよかった。

「いや、あ…。き、君の名前は？」

狼狽しながら彼は質問してきた。

その様子が先程の引き締まった顔と全然ちがっていて…。  
私はクスリと微笑みながら、自分の名前を名乗った。

「私はニコ・ロビン。よろしくね、ハンターさん」

私達の後ろには首を切断された男達が横たわっている。

そんな洞窟に月の光が入り込み、私達を照らし出す。

洞窟から見える月は綺麗で、でも私達には不釣り合いで…。

そしてこんな状況で激しく鼓動する私の胸は、もっと不釣り合いだと私は思った。

**異界送り×逃亡×出会い（後書き）**

文章が硬いかも…コメディ色ある文章が書ければ。

完結までのあらすじは出来ています。

しかし、一話かくのに時間がかかりすぎか…。

## 悪魔×衝撃×遅い（前書き）

異文化交流回です。

異世界にきた人間と交流するロビン。

まどろっこしい話なので、読み飛ばしてもらっても支障はありません。

## 悪魔×衝撃×遅い

彼：アルディ・ワンカーズ。私たちの文化と異なり、前に名前、後ろに苗字となるらしい。

彼の服装よりも私はそれに違和感を覚えた。

「まつ！ アルディ、親しみをもってアルと呼んでくれ」

「ええ、わかったわ。ハンターさん」

「アルディとすら呼ばんのかい！」

…これはわたしの習慣だ。

いつか裏切る人の名前に対して親しみをもって呼ぶことはできない。だから私は人を名前で呼ばず、船長・剣士さん、航海士さんと名詞で言ってきた。

「まあ、俺の方は初対面の女性の名前を呼ぶことは慣れていないから苗字で呼ばしてもらうが…」

彼が私のことを呼ぶのは自由だ。  
好きに呼べばいい。

「では、お互い情報交換とするかニコちゃん」

前言撤回。

「ニコちゃんはやめて…。ロビンでいいわ」

額に手を当てながら私は言った。

…町中でニコちゃんと呼ばれた私はどのような反応をすればいいのだ。

「それより情報交換する前にここからでましょう。洞窟を抜けて、落ち着いた場所があるから」

私たちの後ろには昨日まで一緒にいた人たちがいるのだ。  
物を言わない死体となって。  
気持ちのいいものではない。

「気が付かなくて、こりゃ失礼。では移動するか…ロビンは立てるのか」

「……。歩くことには支障はないから……大丈夫」

久しぶりに優しさを感じた瞬間だった。  
オハラの悪魔、賞金首、裏切り者、疫病神として人から多くの負の感情を受けてきた。  
そんな私には彼の何気ない優しさがとても温かく感じられた。

■

洞窟を抜け、しばらくすると開けた岩に囲まれた砂浜にたどり着いた。

ドーム状になっている空間の天井には直径10mの穴が開いていて月の光が差し込んでいた。

そして、砂浜から離れた位置には木造の船が浮かんでいた。

大きさは先ほどの海賊団の船員が全員乗っても十分だと判断できる程度だ。

今このような木造の船が存在するとは…。

「それにしても、あいつらのアジトにしては不釣り合いだな…」

「そうね…。夜のここはとても綺麗だね。あの人たちはそんな感性はなかったみたいけど」

座りやすい岩を見つけ俺たちは座った。

この時、対面に座るロビンの岩にスカーフを置いた俺がいる。

「まあ、芸術的感性を持った悪党はどこかぶっ飛んでいて、厄介な奴が多いからな。それを考えるとさっきの奴らは弱くて助かった」

ブラックリストハンターとして捕らえた……ってか、殆どは捕縛せず首を刳ってきたんだが。

まっ！ その体験・経験を通して出会いたくて出会ったわけではない賞金首連中の精神的傾向から言った言葉だった。

「あの人たちが弱かった……？ あの人たちは海軍のいない島や護衛船がついていない商業船を襲っていたけれど、賞金額は西の海でも5本の指には入っていて、それに見合う強さを持っていたわ」

ふーん。やっぱりあいつら賞金首だったのか。

長年のこの職やってると相手を見て犯罪者かどうか見抜けるもんだからな。

それにしても西の海……変わった表現だ。

「下っ端は何てこと無かったが、船長のあいつには驚いたな。初太刀が弾かれるんだから。なんか言っていたな……ハリハリの実を食ったハリ人間？　ありやなんだ？」

「あれは悪魔の実を食べた人間よ」

「悪魔の実？」

知らないの？ とそんな感じでロビンは答えた。

ハンター仲間から魔王が作曲した楽譜の存在は聞いたことがあるが…。

楽譜を演奏すると呪いが降りかかるって代物だ。

その系統のモノか？

「…悪魔の実を実を食すことで、海に嫌われるという代償の代わりに特殊な能力を得ることができる果実のことよ」

思わずポカンとしてしまった。

う、うさくせーっ！ なんだそのとんでも果実は！？

誓約と制約を考慮しても、信じられない。

海に嫌われる程度の制約で全身から鉄製のハリを出すことができるだー！？

「信じられないって顔をしているわね。でもね、悪魔の実は実在するわ。その実を食べた能力者もね」

そう言って、ロビンの腕を動かすと…手が増えた！？

“凝”を行う オーラは見えない。

凝はこの職では呼吸と同じように行われなければならないので、ほぼ無意識で行える。

手が増える！？ って両腕に3つずつ！

どんな念能力だ！？ 手を具現化する具現化系、それを操作する操作系、そして放出系か？

それぞれの系統をバランス良く用いた高度の発だ。

「あなたが悪魔の実の能力者を見て驚いているように、私もあなたの強さをみて驚いているわ。あなたのような人が西の海にいるなんて。そしてそれ以上に疑問に思っていることがあるわ。あなたの出身はどこかしら？」

「あ、ああ。おれの出身はジャポンだ。この格好はうちの民族の伝統的なものだが、儀礼的な意味はなく、好みとして着ている」

ロビンは俺の言葉をかみ締めるようにして聞いた。

「ジャポンはどここの海に位置する島なのかしら？ 西の海では聞いたことがないわ」

「島ってか、列島だな。国土は約37・8万km<sup>2</sup>、あまり海の位

置は聞かれないな。パドキワ共和国の東に位置する国だ」

そっいつて俺は懐に入れてあつたPDAを取り出し、世界地図を見せる。

ロビンはPDAに驚きながらも受け取り、食い入るように地図を見るのだった。

■

数分後ロビンがゆっくりと語りだした話は俺を月までぶっ飛ばすんじゃないか、と思うくらいの衝撃を与えた。

どうやら俺はあのピンクの扉で、違う世界にきたようだ。

ロビンの話を聞くまでは違う場所、大陸に飛ばされたと思っていたが、どうやら元々俺が住んでいた世界の過去でも未来でもなく、違う世界にきたのだ。

ロビンが提示した地図と、俺の地図があまりにも違いすぎた。

この世界はグランドラインという海に対して直角に横断するレッドラインによって東西南北の海に分かれている。これがこの世界の地理だ。

大陸が何百万年という年月をかけて移動するので、大陸の位置が変化することはある。

しかし互いに提示した地図の大陸が、どう動いても一致することはないだろう。

■

この時の俺はこのぶっ飛んだ事実よりも、おそらく元の世界へ戻る可能性がみつからないという現実に衝撃を受けたのだった。

## 悪魔×衝撃×遅い（後書き）

どうでしょうか？

異文化交流回でした。

読み手としては主人公が異世界に来たのは当然のようにわかっているのに、面白い回ではなかったかもしれない。次からはテンポ良くいききたいです。

感想・評価が執筆する意欲につながります。  
どうかよろしくお願いします。

**前向き×探し物×敵襲（前書き）**

本話で主人公がロビンに提案をもちかけます。

その案……少し考えてから読んでもらえると嬉しいです。

## 前向き×探し物×敵襲

「あゝ。船旅つつのは退屈でしょうがないな……」

現在俺とロビンは西の海を航海中だ。

次の目的地はトロアという島だ。

そこで、グランドラインへの海図、ログポースというグランドライン専用の羅針盤を入手するという。

グランドラインか……俺のいた世界と違って、この世界の自然は影響力が大きすぎる

「俺のいた世界か……。こつちの世界にきて三日たったのか」

ハリ男率いる鉄芯海賊団のアジトを後にして三日がたった。

あの後、ロビンと話し合った結果、俺たちは行動を共にすることになった。

俺たちが置かれている状況から、俺たちは手を組むことになった。

それぞれ理由がある。

俺はこの世界のことを全く知らない。

なにより移動手段の主が船であるのに航海術を身につけていないことは大きい。

ロビンは鉄芯海賊団を抜け、西の海からグランドラインを目指すらしい。

しかし、グランドラインは彼女一人で乗り越えられるほど簡単な海

ではないことが理由だ。

「アル、そろそろトロアに着くわ。準備をしてちょうだい」

「あいよ、ロビン」

ロビンが俺の名前を呼んでいるのは、手を組んだ時の条件だ。  
あちらの条件は、この契約をロビン側が一方的に打ち切る権利を有  
するということだった。

これはロビン側があまりにも有利な条件だったので、二つ目の条件  
を要求した。

それは一日に3時間、俺に対して授業を行うということだ。

この世界の常識、一般教養、専門知識などを教えてもらっている。  
昨日初めて授業を受けてみたが……マーベラス！

俺は数年前に30代に足をつっこんだおっさんだ。

十代で念を習得したので若さを保っているため、外見はまだ二十代  
に見られる。

そんな俺が年下美人のロビンにマンツーマンで授業を受ける……。

一週間前までアングラな世界で行われていた命のやりとりが嘘のよ  
うだ……。

心が洗われる。

また、甲板で纏をしている時に感じる、穏やかな海風も気持ちいい悪いことばかりじゃない。

ゆとりある生活を満喫してるのだ。

俺のいた世界の両親・友人・ハンター仲間と会える可能性がゼロに近いとはいえ、いつまでも落ち込んでるわけにはいかない。

昔と違って今回は誰かが死んだ訳ではない。

両親も知り合いの念能力者に依頼して、俺が死んでいないことは掴めるだろう。

俺はこの世界で新しい人生を歩むのだ！

あいつらに手紙を書くとしたら、昔みた映画のようになんか書こう。

「落ち込むこともあるけど、この世界で頑張ってますってな」

■

トロアに着いた。

この町は西の海でも活気溢れる町だ。

島の中心には様々な商品を扱う店が立ち並ぶ。

ここならばグランドラインの海図、ログボースを購入できると思っただけれど……。

「まっ！ 需要と供給の問題もあるだろうが、それ以前に希少なもののなんだろうよ」

「そうね、一応予想していたのだけれど……」

このトロアでもグランドラインの海図とログボースは入手できなかった。

純粹に取り扱いがないのか、表の店では取り扱いがなく裏のみで流通しているのか。

後者の場合入手の際は何らかのコネが必要だ。

人脈やお金が必要だが、私に人脈なんてものは存在しない。

お金も海賊団のアジトから持ち出した金貨と宝石を足しても500万ベリー程度だ。

さて、どうしたものか……。

「……なあ。あてが無いなら、俺にいい案があるんだが」

「えっ」

先のことを考えたらアルがそう言った。

アル……彼をそう呼ぶのにはまだ慣れない。

彼も厄介な条件を提示してきたものだ。

久しぶりに人の名前を呼ぶのは、その……少し照れてしまう。

照れは表情に出てないと思うけれど……たぶん。

ただ、呼ぶと心が温かくなり、少し心地がいい。

「俺の案というのはシンプルかつ合理的、そして一石二鳥の結果が期待される」

「そんな案があるなら是非採用したいわ。ただ、落ちてくるのが本当に鳥なのか心配だけれど」

「ふふ……その案というのはだな」

彼は子どもがいたずらを思いついたような顔で説明した。  
その顔を見て私は微笑ましなと思った……。

その反面、彼の案はハイエナのような案だった。

■

「か、海賊だ〜!!」

それはトロアに着いて4日目の夜だった。

俺とロビンは宿をとり、チャンスが来るのをまっていた  
そして今夜。ベッドで寝ている時にそれは聞こえた。

その声に待ってましたとベッドから跳ね起き、急いでロビンが泊ま  
っている隣の部屋に向かい、合流。

海賊が出たという港へ向かう。

彼女の部屋に入る時ノックをしたのは言うまでもない。

「ロビン、あの海賊団の懸賞金は？」

「……船長のみだけど2700万ベリー。現在の西の海では最高額  
よ」

ロビンが懸賞金のリストと港に停泊する海賊船に掲げられた海賊旗  
を照らし合わせながらいう。

「島の住人達には悪いが、俺たちにしてみれば鴨がネギ背負って来たな」

「鴨さんが蒔木とお鍋をもっていたら、喜ばしいのだけれど。それより相手に勝てなければ、あなたの案は成功しないわよ」

「とりあえず、ここから“見”だな。悪魔の実の存在がある以上、身体能力でいくら勝っていても能力次第では俺の手札が全て通用しない可能性がある」

俺の考えた作戦は単純なものだ。

この島に来た海賊団をとっ捕まえ、懸賞金を得る。

そして可能性は低いが海図とログポースを持っていたらそいつを奪う。

もっていなかったとしても、この島である程度有名になれば人脈も得られ、時間はかかるが望むものは得られる期待値が生じる。

ただこの作戦には、十中八九ロビン個人にデメリットが生じるということが問題か。

その問題以上に問題がある。

それは、同じ場所に留まる危険性を彼女自身が自覚していながら、俺に何も言っていないことだ。

まっ！ こいつらが海図とログポースを持っていたらなんの問題は無い。

「海軍だわ」

「早く着いたつもりだったんだが、仕方ない。ここで様子を見よう」

海賊たちがいる港から500m程離れた4階建ての家の屋上に俺たちはいた。

海軍が海賊を町へ向かわないように包囲している。  
海軍の動きがいい、よく訓練されているのだろう。

「海軍が海賊の討伐に成功した場合、今回の案は不成功ね」

「俺がみたところ、足の運びや動作からあの中に大男を倒せるものはいない。大男が悪魔の実の能力者ならな」

「……強者は強者を知ることかしら？ それにしても随分と目がいいのね」

「まあな、この距離であれば口元の動きまでわかる」

海軍の大佐と大男が対峙していた。

あの大男は随分余裕をもっているな。

けれど動作からは別段強いとは読み取れない。まるで四大行を取得して念を極めた未熟者のようだ。

大佐は随分と若いな……しかし動作は大男に比べものにならない程洗練されている。

そして、その二人を中心に海軍と海賊の戦闘が始まったのだった。

前向き×探し物×敵襲（後書き）

どうだったでしょうか？

主人公の案はブラックリストハンターらしい発想の基に発案されました。

次はとある大佐と海賊の戦闘から始まります。

評価を下さった皆様ありがとうございます。  
高得点をつけてもらい、とても嬉しいです。

大佐×海賊×見学（前書き）

誤字脱字が多い私ですが、今回の弾岩は誤字ではありませんので…。

## 大佐×海賊×見学

「大佐、包囲完了しました」

「ご苦労！ 人数で勝っているとはいえ、西の海一番の悪だ！ 気を抜くな」

「はっ！」

伍長は持ち場に戻った。

私も戦闘態勢をとる。

……刀を握る手が汗ばんでいる。

目の前に存在するのは、わずか数ヶ月で2700万ベリイという高額の賞金首になった弾岩のマドンが率いる凶悪な海賊団だ。

「……大丈夫だ。鉄はまだ切れないが岩なら切れる。問題はない」

「んががが！！ ずいぶん若い大佐殿が率いているのだな！！」

私の呟きをかき消す大声が港に響いた。

船から山賊のような風貌の大男が部下を率いて下りてきた。その数は20人を超えている。人数はこちらの三分の一だ。しかし、その兵力差を気にした様子が全く感じられない。

その余裕を見て私の鼓動が早くなる。

「若いからといって侮るな、底が知れるぞ」

「おうおう、それもそうだな」

それが開戦の合図だった。  
あちこちで戦闘が始める。

私は刀を抜きマドンに向かって走る！  
近づき抜刀！ 相手の両腕を一呼吸で切断する。

手ごたえはあった。  
相手が悪魔の実を食べた能力者とわかっている以上、峰で切る必要はない。  
斬岩の太刀をもって切りつけた。

「こりゃあ、驚いた。大佐殿は岩を切るのか」

「くそ……」

斬岩の太刀がまるで利いていないのか！？

「大佐殿、自己紹介がまだだった。わしは弾岩のマドン。イワイワの実を食べた岩人間だ！」

岩人間というのは想定していた。

そのため、斬岩の太刀で切ったのだ……それが効いた様子はない。マドンの足元を見ると、腕の形をした岩が転がっていた。しかし、マドンの腕は新しい腕がどろどろと生えてきた……。

「まさか……ロギア系だと!？」

驚愕。

ロギアである以上。

弱点を突かねば、傷をつけることは不可能だ。

「久しぶりに体を切ってくれたご褒美だ大佐殿。苦しむ間もなく押しつぶしてやろう！」

にやりと笑いながらマドンが私に手を向けたとき、悪寒を感じた。

「総員退避!!」

部下に退避命令を出し。  
攻撃にそなえ刀を構える。

「うあ、わ……」

威厳の無い声が漏れた。

私の身長を超える岩が弾丸のように放たれたのだった。

■

海軍大佐とはいえ、たいしたことはない。

腕を切られた時はヒヤっとしたが、それだけだ。

ここで海軍を壊滅させ、町で暴れまわる……待ちきれない。  
さつさと、この大佐を殺そうと思い、岩を発射した。

「なんだあ？」

俺の岩は確かに大佐を潰したはずだったが……。

潰した後には生じる肉がつぶれる音や滲み出る赤い血を感じることはなかった。

ふと視界を右にずらすと、奇妙な格好をした剣士が大佐を左腕に抱えこちらを見ていた。

……それより、こいつはどっからきやがった？

「おう兄ちゃん、なにもんだ？ 海軍じゃねえようだが、怪我したくなかったら引っ込んでな」

そんなことを言っておきながら俺はそいつに向かって岩を発射した。そいつの目がおれを道端に転がっている石をみるようでム力ついたので。

「ふんっ！」

そいつは腰のぶら下げた刀を抜くことは無かった。空いた右手で放たれた突きは、俺が放った岩を粉々に砕いたのだった。

「……なにしたんだ兄ちゃん？ お前さんも能力者か？」

「さあ、どうだろうな。自分の手札を相手に教える文化で育ってないんでな」

遠まわしに俺をばかにしている、いや挑発されている。

いい度胸だ。

こいつが岩を砕くことができて、わしを殺すことはできない。

「兄ちゃん、その大佐じゃ物足りなかったとこだ。勝負を邪魔したんだ、付き合ってくれや」

「その前に聞きたいことがある」

「なんだい？ 大きく育つ秘訣かい？」

「低すぎ高すぎない身長がいい。服を買うときが大変だからな。グランドラインの海図とログポースを持ってるか？」

持っている。

わしはこの島で略奪をし、食料・金を得たらグランドラインに行くつもりだったのだ。

わしはワンピースを目指すつもりはない。

グランドラインに存在するといわれている、ありとあらゆる鉱物が採掘できる鉱山……。

グレート・グレー。

オール・ブルーと双壁をなす伝説を見つけないという夢があるのだ！

こんなじじいが夢なんて恥ずかしくて言えねえがな。

「そうか持っているのか。それさえ聞ければ十分だ」

「なんだ兄ちゃん、海賊のモン奪うつもりかい？ 海賊よりひでえな」

「海賊なんて職業に身をおいてりゃ、奪い奪われの繰り返しさ。今回はお前さんが年貢の納め時なんだよ」

的を射た答えだ。

故郷の島を出て、仲間を集め海賊になった時に覚悟はしている！！

「ならこれ以上、言葉はいらねえ。奪いたいものがあるなら奪えばいい！ 守りたいものがあるなら守ればいい！！ 大海賊時代は強い奴が自分の我を通す時代！ 俺の邪魔すんなら潰すまでよ！」

こうしてトロア島でハンターと海賊との死闘が幕を開けた。

## 大佐×海賊×見学（後書き）

本話でイワイワの実をログアと位置づけていますが……。  
どうでしょうか？

いろいろ疑問があると思いますが、寛大な目で見ていただければ……。

みなさんがお気に入りに登録、評価してくださったおかげ日間のランキングにはいりました。

本当にありがとうございます。

みなさんの期待に応えられるお話を考えていきたいと思っています。  
これからもよろしく願います。

## アイ（前書き）

この話を書くためにハンターハンターの25巻を読み直しました。

## アイ

アルディー・ワンカーズは非常に恵まれた人間だ。  
事実彼の両親はハンターであり、膨大な資産を有している。

彼は両親から惜しめない愛情を受けたが、それは甘やかすということではなかった。

彼は幼い頃からハンターとなるための訓練も受けたのだ。  
結果彼は、13歳という年齢でライセンスを得て、15歳の時には  
念を習得したのだった。

周囲の人間は彼の努力を知らず、家庭環境からなるべくしてなった  
と評価したのだ。  
親の七光りと呼ぶ者さえいた。

15歳という年齢の彼に、それらの評価を聞き流すことはできな  
かった。  
両親を超えた優秀なハンターと評価されるために、周囲に力を誇示  
するために、シングルハンターという称号を欲するようになった。

この時、両親が息子の変化に気付いていなければ、今の彼は生きて  
いないだろう。

両親は息子の変化に気付くと、すぐさま行動をとった。  
家族会議という名の親子喧嘩だ。

父は戦闘に特化した念能力者ではなかった。  
母が戦闘に特化した念能力を有していたため、親子喧嘩は母と息子で行われた。

大雑把な性格の母と、理屈屋で反抗期の息子の3時間にわたる壮絶な喧嘩を父は目を逸らすことなく見つめていた。

3時間後肉体言語で語り合い、満身創痕になった息子に父は会わせたい人間がいるといった。

1週間後父と子はハンター協会に向かった。  
彼がそこで会ったのはハンター協会会長のネテロだった。

父はネテロにハンドメイドで造ったTシャツを納めるために訪れたのだった。  
そして今回の報酬を金銭ではなく、ネテロの歩んだ道を息子に話して欲しいと頼のみ、ネテロは快くそれを承諾した。

高みにいる人間

ネテロの人生からアルディは、高みに到達した人間の存在を目の当たりにしたのであった。

■

ロギア系の特徴をロビンから聞いた後、アルディの行動は早かった。

四階建ての家の壁を、足場にして跳躍。

500mという距離を一瞬にして移動し、岩に押しつぶされそうになった海軍トロア島支部の大佐を助けた。

対峙したハンターと海賊の会話はすぐ終わり、互いを敵と認める。こうしてトロア島でハンターと海賊との死闘が幕を開けたのだった。

■

この死闘の始まりと終わりは一瞬であった。  
全ての流れを把握できたのはアルディのみ。

“ 堅 ” を行い、凝を行うことで足にオーラを集め踏み込む！！  
彼はマドンとの間に存在した3、40mの距離を無くした。

父が創った刀に、母が神字を書いて生まれた愛刀「あい」。

“ あい ” によつて繰り出される4つの斬撃。  
斬撃を一つも感知することなく、マドンは四肢を切断されたのであった。

人間ならば、この段階で結果は決する。  
だがアンディの放った斬撃がマドンに傷を与えることは無い。  
悪魔の実の能力故だ。

ロビンからログア系がもつ特徴を聞いていたアンディ。彼は自身の斬撃で相手を仕留めるつもりはなかった。

故に四肢を切断した時点で“あい”を鞘に収められていた。

マドンの四肢から新たな四肢が生えるまえに、決着をつけるべくアンディはマドンの背中に手を置き、能力を発動した。

死闘が始まり、アンディの能力発動までわずか1秒のことであった。

■

フリージャー  
重力操作

5年という月日。

能力開発にかけた長い年月は、それさえも制約のひとつに過ぎなかった。

厳しい制約と誓約によって生み出された、操作系に属するアンディの重力の方向を操作する能力。

アンディは自身とマドンが受けている重力の方向を変え、二人の足は地面から離れ、海の方向に

落下!!

悪魔の実が与える能力は絶大だが、弱点が存在する。  
それが海に嫌われるということだ。  
アンディはそれを利用する。

重力に逆らうことはできない。  
マドンとアンディは海の方に“落ちていく”

“落ちる”という感覚は二人のみ感じることができた。  
周りの人間にはいつのまにか二人が地面に対して水平に飛んでいくようにしか見えない。

アンディは海の上まで“落ちる”と能力を解除。  
重力は元に戻り、二人は海に落ちる。  
大きな水しぶきをあげ、二人は沈んでいく……。

■

海中で一人の男の命が失われた。  
生前男を構成していた四肢は切断され、左胸にある穴からは血が溢れ、海中に流れ出ている。  
男から命は感じることはできなかった。

海に沈んだ能力者は悪魔の実の呪いにより能力を発動できない。  
アルディは“流”を用いた抜き手で、彼の左胸を突き刺し、そのまま男の心臓を握りつぶしたのであった。

こうしてトロア島のハンターと海賊との死闘が幕を閉じた。  
海賊がハンターによって命を奪われるまでの時間は、わずか7秒にも満たなかった。

■

海から海賊の体を港まで移動させ、地面の上に横たわらせた。  
目を見開き、苦悶の表情を浮かべている顔。  
俺は海賊の目を閉じさせた後、死体に向かって拝む。

どんな悪党でも死ねば仏だ。

「き、きみは一体……」

若い大佐がおそろおそろ近づいてきた。

この大男の部下たちはすでに船長が殺されたことで、士気が下がっているのが伺える。

海軍と海賊の戦闘も終わりが見えていた。

質の高いトロア島の海軍だ。

ロギア系の能力をもった船長におんぶにだっこの海賊達では勝つことはできない。

「はじめまして、大佐。おれは賞金稼ぎだ。ちよいと話があるんだが、時間をとってもらえないかい？」

さて、ここからが難しい。

貰えるものは貰い、取れるものを取る努力をしなければ。

戦闘より神経を使わなければいいが  
今夜は寝るのが遅くなりそうだ……

## アイ（後書き）

ハンターハンターの人間たちとワンピースの人間たちの動ける速さは大分ズレがあるような気がします。

ゴン達が突入して3秒後にはナックルがユピーを殴り、4秒ちよつと過ぎた時にはゴンとキルアはすぐ離れた場所にいたのです。

常時”剃”以上のスピードで移動しているのでしょうか……。

皆様。

お気に入り並びに、高評価をしてくださってありがとうございます。ついつい、自分の小説が気になって確認することが多くなっています。

みなさまが温かく読んでくださるおかげです。  
ありがとうございます。

## 帰宅×収穫×お話

「精神的に疲れた……」

海軍の基地で大佐と交渉が終わった後、おれはホテルに戻ってきた。時計をみると日が変わっていた……2時間もかったのか。

「ん？ 手紙か？」

扉には手紙が挟まれていた。  
手紙にはこう書いてあった。

“ 朝まで起きています。 疲れていなければ、部屋を訪ねて下さい  
R ”

「うーむ」

結婚した友人の気持ちがわかったような気がした。  
疲れて帰宅。

そんな時に温かい言葉をかけてもらえることを考えると、結婚も悪

くはないかもな。

「まっ！ とえりあえずシャワーだな。 海水で髪が、ばしばしだ」

■

私たちは港から離れた家屋の屋上で、海賊と海軍のやりとりを見ていた。

海賊の頭がロギア系だとわかったとき、今回の計画を諦めた。なぜなら、ロギア系がもつ絶大な力を私は目の当たりにした……。

大将 青キジ

彼のことは鮮明に覚えている。

そんな私の心情を裏切るように、ロギア系の特徴を私から聞いた彼は、脅威の身体能力で港に向かって跳躍した。

馬鹿！

彼はロギア系の恐ろしさを理解していない！  
私は彼を追いかけた。

この時、自分が賞金首であることや、海軍がいることが頭に浮かんだ。

けれど、私は止まることはできなかった。

私が港に着いた時、すでに事は終わっていた。

海軍に見つからないように物陰に隠れる。

そして、彼の背中に耳を生やし、事の顛末を把握した。

「……無茶するんだから」

心配させたお礼を後で返さない。

私は安堵しながらそう思った。

■

「2500万ベリーの賞金、グランドラインの海図、ログポースだ。200万ベリーは手数料・情報料として間引かれた」

深夜、俺はロビンの部屋にいた。

ロビンは窓際の椅子に座り、ライトの明かりで本を読んでいた。

部屋の中央に設置された机に、品々を並べた。

「あなたの計画は成功というわけね」

「今回は運がよかったからな」

戦闘を行った場が海の近くであったこと、海賊の能力が岩という能力であったことだ。

海から離れていたり、岩ではなく能力が火、水、風だったりしたら、俺の手札は全て通用しなかっただろう。

現存する悪魔の実と能力の把握。

そして能力者の情報は、今後この世界で生きる上で必要だ。

相手の能力がわかっているのは大きなアドバンテージになる。

しかし……ロビンが本から視線をこちらに向けない。

「どうしたロビン？」

「どうしたですって？」

……Oh。

母親が怒った時と同じ雰囲気は滲み出てやがる。

……しばらくネチネチとお説教をくらったのだった。

■

説教をくらった後、ロビンは機嫌が戻った……と思う。  
あくまでも俺の主観だが。

彼女のようなタイプは心情が読み取りにくい。

「これでグランドラインに行く条件は整ったわ」

「あくまでも最低条件が、だろ？」

今回のことでこの世界の恐ろしさを実感した。

訓練を受けていない人間が、一つの果実を食すだけで強力な人間兵器となるのだ。

事実、今夜対峙した海賊の能力は中堅クラスの念能力者と相違なかった。

あくまでも能力だけの話だが。

そして、グランドラインという海は世界中から強者が集まるだけではなく、凄まじい自然が待ち構えている。

「自分でも焦っているのはわかっているわ。でも私はグランドラインに行きたいの」

……そうだ。

彼女はおかしい。

出会ったときから、俺はニコ・ロビンが、世間的に犯罪者と位置づけられる人間だと見当をつけていた。

奴らもつ“何か”を職業柄気付くことができるのだ。

そして、先ほど訪れた海軍の基地で賞金首のリストを見ている時に見つけた。

“ 悪魔の子 ニコ・ロビン ”

彼女の手配書だった。

疑惑が確信になった瞬間だった。

どうやら彼女は8歳にして軍艦6隻を沈めたらしい。  
かけられた賞金は7900万ベリ！。

不自然だ。

組織といのは体面を気にする。

事実、今夜の出来事を俺は大佐から公言しないように言われている。  
その対価が、今日の収穫に結びついたのだが。

この世界でも組織のあり方はさほど変わりはないようだ。

しかしながら、体面も気にせず8歳の少女を高額の賞金首にした政府。

何らかの意図があるのは間違いない。

一方で政府という組織を敵に回して生き残っている彼女には感服する。

ここで、先ほどの疑問が生じるのだ。

過酷な環境におかれながらも、生きるのはなぜだ？

なぜ諦めなかった？

それは政府の意図と関係があると俺は考えているが……。

それをはっきりさせたかった。

なぜなら、グランドラインという過酷な海を共に渡らなければなら  
ない。

自身の身を守る力や、自然を乗り越える知識以前に、互いを信じる

ことができなければ、この先俺たちの関係は破綻し、命を落とす。

故に俺は彼女との関係を、グランドラインに向かう前にはつきりさせたかった。

だから、俺は婉曲な表現は一切せずに直接こう言った。

「悪魔の子、ニコ・ロビン。お前のことが知りたい」

この一言が俺たちの関係を破綻させるものか、より強固にするものかはわからなかったが、普段ポーカークフェイスなロビンの顔が驚愕で満ちていたことはわかった。

帰宅×収穫×お話（後書き）

今回の話はあまり上手くかけませんでした。

コメディな部分も少ないのも駄目ですね……。

フルメタルパニックを読み直してみます。

いつも読んでくださる皆様、本当にありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

## 二人×お酒×噂

「乾杯」

私とアルはグラスとグラスを合わせる。

私たちはトロアから西のローグタウンとも呼ばれる、ミイオ島の酒場にいる。

この島は西の海で最もグランドラインの入り口に近い島だ。

私たちはついにグランドラインに入ることにしたのだ。

彼と出会って2週間しか経過していない。

でも、オハラを出て後に出会った人間の中では、一番良好な関係を築くことが出来ている。

けれど、信じるという気持ちをもつには抵抗がある。

ただ、私は彼を理由もなく裏切ることはいらない、それは確かだ。このような心情になったのは、トロアでの夜が影響している。

あの夜、私の過去を隠さず喋り、彼がそれを受け止めてくれたことが大きい。  
どうして自分のことを、あんなに素直に話すことができたのうだろうか。

彼が纏う雰囲気がそうさせたのだろうか。

そして、こうやって彼と楽しくお酒を飲める関係になれたのは良かった。

今までは酔わないように神経を払いながら飲んでいたから。

私は……少し心を開けたのかもしれない。

今の私たちは、互いに教え学び合う関係でもある。

私が彼にこの世界の常識や知識を教える。  
彼は私に戦う術を教えてくれる。

教えてくれるのはサブミッションだ。  
まだ、教えてもらって数日しかたっていないが、私の能力とサブミッションは非常に相性がいいと実感している。

また平行して、私の能力も鍛えている。  
彼が、悪魔の実の能力というのは、鍛えれば能力は向上すると考え

たためだ。

腕を咲かせる本数を増やしたり、今まで咲かすことがなかった体の部分を咲かせてみたりと、模索しながら訓練している。

彼と一緒にいるようになってからは少しずつ、ゆとりが持てるようになったと思う。

けれど、リオ・ポーネグリフを求めるといふ目的は変わらない。

これまでその目的を達成するために、色んな悪党を利用しながら政府から逃げてきた。

そんな日々に、心休まる時などなかった。

だから、私はこの時を大切にしようと思う。

明日も続いているかどうか分からないこの時間を……。

■

酒を飲みながら思う。

俺には人を変える力はない。

かつて弟子を二人取ったことがある。

二人とも俺と同じブツラクリストハンター志望だった。

一人は、一族を皆殺しにした奴らに復讐するために。  
もう一人はハンターになった理由を知らない。

聞くことさえもできない。

そいつ自身が人道から外れ、賞金首になってしまい、俺が殺してしまったから……。

二人とも心に何か抱えているのはわかった。

俺と時間を共に過ごすなかで変えられると思ったが……無理だった。

人を変えるというのは、変えるだけの“何か”を持った人間でなければできない。

俺にはそれがなかった。

どんなに鍛錬しようとそれは変わらない。

だからロビンの抱える闇を取り除くことはできない。  
俺が出来るのは力を与え、道をつくり、導くことだ。

ロビンの敵は“世界”だ。

ロビンを変えるような人間はきっと巨大な“何か”を持っている。  
それこそ、そいつは世界を変える力をもっているかもしれない。

俺の役目はそいつとロビンが会おうように導くことだ。

そいつと導かせることが、俺が彼女を救う方法だ。

きつと、そいつはロビンを救ってくれる。そんな気がする。

それまではこいつと一緒にいてやろう。

俺がこの世界で自由に動くのはその後でいい。

そう思った。

■

「あら？ お客さんが急に減ってきたわ」

ロビンがそう言った。

確かに、先ほどまで騒いでいた者たちが店から出て行っている。

「ちよいと、店主に聞いてくる」

席を離れ、酒場の店主がいるところまで歩み寄る。  
店主も焦ったように片付けを始めている。

「マスターどうした？ 閉店する時間でもないだろう？」

「お客さん、のんびりしてる場合じゃないよ！ お客さん、旅人だ  
ろ？ 今夜は泊まっている宿に早く帰りな」

店主は何かに脅えているようだ。

「なんだ？ この島には幽霊でもでるのか？」

「幽霊ならまだいいよ。出るのは殺し屋さ！」

……殺し屋ねえ。

殺し屋が出る。

そんな情報が広まる場合、猟奇的な殺人を繰り返す、解体屋ジョネ  
スのような奴か、ゾルディックのような一流の殺し屋が出現するケ  
ースに、俺は大まかに分ける。

前者は人々の日常に潜み庶民たちが恐れ、後者は主に裏の権力者た  
ちが恐れるのだ。

この場合前者か……。

「その殺し屋の情報とか、噂話を知りたいんだが？」

「お客さん！？ あ、あんた剣士かい？」

店主が俺の風貌をみながらそう言った。  
相変わらず侍スタイルの俺だ。

しかし、剣士じゃなくてハンターでありたいものだ。

「やめておきな……。その殺し屋は、西の海で一番強い殺し屋だ。  
剣士である限りそいつには勝てないよ」

「どういう意味だ？」

「目撃者の話だと、そいつには剣が一切通用しないらしい。そいつに挑んだ剣士で傷をつけた奴は一人もいないと言われている。そして、そいつらは全員殺されている……。噂だと、そいつは“あの”悪魔の実を食った能力者らしい」

悪魔の実の能力者か！？

剣が通用しないという情報が気になる……。

一体どのような能力で剣を無効化しているのか。能力によってはロギアのように、こちらの攻撃は全部効かない可能性がある。

悪魔の实の恐ろしさは体験済みだ。

……よし！

店主の言うように、今日はさつさと宿に帰ろう。

昼間に町でトランプを買ったことだし、宿でロビンとポーカーでもするか。

「そりゃ、恐ろしい相手だ。俺は尻尾巻いて宿に戻るよ」

「ああ、そうしな。幸いそいつは賞金稼ぎだからな。あんたが“賞金首”じゃない限り、そいつは海賊共を追いかけるだろうよ。この町はグランドラインに近い島だから、賞金首の海賊共がわんさかくるのさ。奴からすれば良い餌場なわけだ」

「ほんとに“賞金首”じゃなくて良かった。じゃあ、今日はもう帰らせてもらうよ」

「また今度きてくれや」

「ああ。ここは店の雰囲気もいいし、酒もつまいからな」

店主との会話を終えて席に戻る。  
いやあ、殺し屋の賞金稼ぎか。  
見敵必殺をモットーにしているんだろうな。

能力がわからない能力者と、わざわざ戦う必要はない。  
避けられる戦いはなるべく避ける。  
これが臆病者の俺の生き方だ、

「いや、まいった、まいった。なにやら“殺し屋”と呼ばれる賞金  
稼ぎが町にいるんだと」

ロビンのいる席にもどり、朗らかに情報を伝える。

「まあ、その“殺し屋”は賞金首にしか用はないみたいだし安心だ  
な！」

「アル……あなたに嘘をついていたことを思い出したわ」

ロビンが顔を伏せながら言う。  
どこか演技じみているのが気になる……。

「なんだ？ 今日の訓練の時、腹筋の回数ごまかしたのか？」

「いいえ。今日じゃなくてトロアの夜よ。あの時マドンの賞金額を西の海一番って言ったけど、現存する賞金額で一番高いのは私なのよ」

店内には人は俺たちしか残っておらず、店主もカウンターの裏で片付けをしているため、今の会話を聞いている者はいない。

「そっぴやそうだ！ お前7900万ベリーだもんな」

「ええ、8歳でね。今のこの町で一番高い賞金首は私ね。そして、そんな“高額賞金首”のそばにあなたはいるわ」

「……」

「ふう……今夜無事に宿まで帰れるといいんだけど」

ロビンはアルカイクな笑みを浮かべながらため息をついた。  
俺はため息もだすことができなかった。

ただ無事に帰れるように願った。

## 二人×お酒×噂（後書き）

グランドラインでの話しを早く書きたいので、テンポを早めにしました。

いつも評価・感想してくださってありがとうございます。  
これからも頑張ります。

## 一人×帽子×一番

「おお。昨日のお客さんじゃないか。昨日は無事に宿まで帰れたんだね」

「ああ、運よく出会わなかったよ」

昨日、あれから酒場を出た後、俺とロビンは宿に帰った。  
その道中俺は常時“円”をしながら歩いていた。

俺の円は半径100mまでなら探れる。  
昨日は用心し、強そうな奴を感知した場合、迂回ながら宿まで帰ったのだ。

「それで、今日はどうしたんだい？ 今の時間帯じゃ酒は用意できないよ」

「いや、町の住人の情報だと、この酒場がグランドラインの情報量を一番もっているという評判を聞いてね。グランドラインに入る前に情報を仕入れにきたのさ」

常識が通じない海。  
それがグランドライン。

いつ、いかなる場合も情報は収集は重要だ。  
どの情報が自身の命と直結するかわからないからだ。

「なるほどね。お客さんの言うとおり、うちは色んなお客が来るからね。その分情報も集まりやすいのさ。そして信憑性も高い分、情報量は高いよ?」

店主はにやり、としながら言った。

いいね、この雰囲気はハンター時代に味わったことがある。  
自負するだけあって、いい情報が期待できそうだ……。

■

200万ベリーを使って、グランドラインの情報を手に入れた。

まず、リバースマウンテンからグランドラインへ入る際の注意事項。  
グランドラインの旅の仕方。それに伴うログポースの絶対性。

島ごとの四季と、出鱈目な風・海流・天候。

そして、空島という空に浮かぶ島や、深海に存在する島、恐竜がいる古代の島などが存在するという噂。

最後に町一番のブティックの店の情報。

これはサービスで情報量はとられなかった。

前の世界でも、とんでもない物体・生物・秘境の情報は聞いていた。しかしグランドラインは、それを上回るようだ。

これまでの常識は、この海で置いていった方がいいかもな。これからは柔軟性を重視するべきか……。

そんなことを考えながら歩いていると町の中心街から少し離れた場所にある、町一番と評価されるブティック店に着いた。

この店来る前に買った、食品は入り口の近くに置いておこう。

店内に入ると、小奇麗に身を整えた女性店員が顔を強張らせながら俺を迎えた。

俺の格好は相変わらず、着物に刀をぶら下げる侍スタイル。

これで、浮かなければ、店内には銃をぶら下げたピエロでもいるのだろう。

そんな俺がなぜ、ここにいいのか説明するとロビンの誕生日を買いにきたのだ。

今週はロビンの誕生日だ。

しばらくは、町に寄る機会はないだろうから、ここで買うことにしたのだ。

彼女は宝石等の装飾は好まないようなので、俺は彼女の服装に合う帽子を買うことにした。

「これなんか、いいな」

俺が見つけたのは、カウボーイハットのような形をした帽子だ。これなら彼女に似合いそうだ。  
白色があるが……彼女が着る服に合うのは黒だな。

「すみません、この帽子の黒色ありますか」

どうやら、在庫があるようだ。

しかし、このような店で買い物をするくらいなら、マフィアのマジトに行った方がマシかもしれない。  
自身のいたたまれなさを感じるのだ。

店員が品物を用意する間に時計を見る。

まだ、正午にも満たない。

荷物は午前中に積み終わり、後は食品を積むのみ。

今日の2時には出航する予定だが……どうやら間に合いそうだ。

■

アルデイと一人の男が町外れに位置する瓦礫置き場で対峙していた。とてもではないが、仲の良い知人同士には見えない。彼らの間に漂う雰囲気を感じる者がいれば、それこそ息苦しさを感じていただろう。

数分前まで無事にこの島を出られると、思っていたアルデイ。なぜ彼がこのような状況に置かれたのか説明しよう。

買い物を終えた後、その通の人通りが極端に減っていた。そして、自分より店に似つかわしくない男が店の正面に立っていた。アルデイは男がブティック店に入るものなら、噴出すことを我慢できないだろうと確信した。

寡黙でストイックな雰囲気を出す、丸刈りの男はダズ・ボーンズと名乗った。

そして、自分と共に人気の無い瓦礫置き場に来るように言った。アルデイには男の用件がうつすらと把握でき、面倒なことになったと思った。

アルディに逃げるといふ選択肢はあった。

事実彼が本気で逃げるといふ姿勢をとれば、逃げられただろう。

しかし、今日買った食品等の荷物がそうはさせなかった。

ここを出た後の二人分の食料品で、20日分の分量がある。  
捨てるわけにはいかなかったのだ。

そして、なにより揉め事を起こして目立ちたくなかったのも大きい。  
この海軍はトロア島の海軍より優秀らしい。

そんな海軍に町を封鎖されれば出航ができなくなる可能性があるからだ。

故にこの戦闘において、アルディはいつものように相手を殺すといふ選択肢を消し去り、素早く、穏便に済ますという選択を選んだ。

しかしながら、その選択もまた困難であると彼は考えていた。  
その男の立ち振る舞いや、纏う雰囲気が強者であると、彼は感じたからだ。

おそらく、目の前にいる男が西の海で一番の賞金稼ぎ“殺し屋”。

出航前に面倒な相手と出会った、アルディは心の中で呟く。

しかしながら、彼はこの戦闘の終わりをすでに見据えていた。

いつものように相手の身体を壊すのではなく、相手の精神を壊すという手段によって、戦闘を終わらせるのだ。

……自分向きではない。

アルディはそう思いながら、相手の精神を追い詰める一手として、ダズ・ボーンズに提案を持ちかけるのであった。

一人×帽子×一番（後書き）

5年後のBWで、Mr1となる男と戦闘です。  
戦闘は次回になります。

次の更新は10日の23時ぐらいだと思います……。

平均でユニークアクセスが二千人を超えます。  
沢山の人に読んでいただき、大変嬉しいです。  
これからもよろしく願います。

## セイ（前書き）

筆者自身がこの一週間、用事で忙しくなるため、次回の投稿が8月19日～20日になりそうです。

みなさま、少し間が空きますが、これからもよろしく願いします。

それでは失礼します。

## セイ

ダズは目の前の敵に戦慄していた。

後数秒たてば1分が経過することになる。

しかし、目の前にいるアルディに傷をつけるどころか、衣服にも触れることができない。

全身を刃物にするスパスパの実の能力を用いての攻撃。

右足の前蹴りをアルディは右足を後ろに、引くことで容易に避ける。

次に繰り出すのは手を地面に着き、逆立ちの状態から繰り出す両回し回転蹴り。

避けられる筈の無いタイミングで放った攻撃をアルディは、ダズを中心に円を描くよう足を動かすことにより、避ける。

アルディの回避後、両足で立ち、両手を刃物の状態で掴むように連続で突きを繰り出す。

が、アルディはその突きの、ひとつを完全に見切った形で避ける。

つまり、戦闘が開始され一分間。

アルディ自身が定めた半径1mから出ることなく、ダズの猛攻を避け続けていたのだ。

これはアルディが戦闘開始前に定めた、今回の戦闘のルールであった。

騒ぎを起こしたくないアルディが提案したのは、一分間アルディは自身を中心とした半径1mの円内から出ないということであった。

ダズは回りくどく感じた。

しかし相手が避けようが、最終的に痛めつけ、自身が追いかける賞金首の情報さえ手に入れば問題はなかった。よって、このルールを受け入れたのである。

このルールにより、アルディは相手を傷つけることなく戦闘を終えようと考えたのである。

しかしながら、相当な力量差がなければ不可能である。

が、アルディとダズでは互いを感じる、あるいは動ける時間差がそれを可能にした。

グランドライン前半であればダズに勝てる人間は小数である。

またダズも能力におごることなく、能力・体術を磨いてきた。

しかし、アルディとダズでは圧倒的にキャリアが異なったのだ。

故に、アルディは戦闘が始まり、纏の状態を維持しているのみで、ダズの攻撃を避け続けていたのだ。

■

「一分たつたな」

アルデイが感情を含まない声でダズに言った。

汗を一滴もかいていないアルデイに対して、ダズの体から汗がとまることはなく、呼吸も荒かった。

「……………てめえ」

荒い呼吸と共に漏れる声。

様々な想いがこめられていたが、アルデイはそれを無視する形で荷物をもちその場を離れようとした。

が、戦闘前に定めたルールを納得したが、それを無視する形でダズが行動を起こそうとした時であった。

戦闘中にも感じなかった、底冷えするような悪寒。

確実にアルデイから自分に向けて放出される流動する悪意。

動こうとした足を一步も前に出すことができない。

その正体はアルディが放つ悪意を持ったオーラである。

「二度は言わない、ルール通りだ。もし、続けるといつのならば……」

抑揚の無い声でアルディは言う。

この間、アルディは燃える方の四人行、“点”を行い手を刀に触れ。

「お前を切る」

“練”を行った。

「うつ!!」

向けられるは明確な殺意。

剣士に傷をつけられたことはない、その自信は全く意味を持たない。久しく感じることのなかった恐怖。

ダズの足は彼が自覚することなく、アルディから後退するようになっている。

ここでアルデイが戦闘前に定めた目的は達成され、二人の戦闘は完全に終わった。  
互いに傷をつけることなく終わった今回の戦闘だが、ダズが一方的に心に傷を負う形で決着したのだ。

■

「遅いわ……」

港で出航の準備を終えながら呟く。  
すでに時計は出航予定15分前を指している。  
彼の身に何かあったのかと、心配し始めた時であった。

「おおーい！」

声ができる方向を向くと彼が走っていた。  
彼は町の東西にはしるストリートを走ってきたのだろう。

それはいいが、彼は急ぐあまり失念していることがあった。

「よつと、これ2人分20日間の食料だ。結構値切ったから、予定の金額より少なめですんだ」

褒めてくれと、そのような形で彼は報告し、荷物を船に積み込む。その時船体が揺れる。

20日間の食料が入った木箱、2つはそれ程重いのだ。それを片手で一つずつもち、重さを無視するように町中を走れば目立つ。

私が賞金首である以上、控えて欲しい異常行動だ。それをたしなめる形で、彼に尋ねる。

「はあ、あなた忘れていることがあるんじゃないのかしら？」

「ああ、すまん。ほら」

彼が私に渡してきたの、ピンク色のテープでラッピングされ、包装された箱。

これは一体……？

「誕生日にはまだ、早いが23歳の誕生日おめでとう、ロビン」

「え……っ？」

彼はそう言った。

誕生日プレゼント……？

突然のことで考えが追いつかない。

「良かったら、開けてくれ」

促されるように開けると、黒い帽子が入っていた。

「似合うと思ってな」

彼が笑顔でいう。

でもその笑顔は凄くまぶしく感じた。

誕生日を最後に祝ってもらったのは8歳……。

誕生日プレゼントをもらったことも嬉しかった。

彼がお店を探し、私に似合う帽子を見つけたという労力が嬉しかった。

それ以上に私が生まれてきたことを祝福されたことが、言葉にでき

ない程嬉しかった。

思わず涙が出そうになる。

「よっしゃ！ 準備は万端。そろそろ行こう！ この世界で一番偉大な海へ！！」

彼がそういう。

おそらく私に気がつかっているのだろう。  
その優しさも嬉しかった。

グランドラインでの後悔は希望ではなく、絶望が待ち構えているかもしれない。

けど、彼と一緒に乗り越えられると思った……。

「その前にリバースマウンテンを越えないといけないわ。半分はここでリタイアするらしいから気をつけないと」

「え？」

彼が呆ける。

ちょっとした仕返しが効いたみたいだった。



## セイ（後書き）

お待ちにしていた方、お待たせしました。

これで西の海編は終了となります。

グランドライン編は戦闘が多くなると思います。

これからもよろしくお願いします。

感想・評価の方をよろしくお願いします。

## 汗（前書き）

9日のぶりの投稿となります。  
これかれもよろしく願いします。

汗

西のローグタウン、ミール島を出航したアルディとロビン。ほとんどなくして、壮大なレッドラインを直視する。

その驚きに浸ることなく、リヴァースマウンテンに突入。

ロビンの指示通りにアルディが舵をとることで、無事に運河の入口に入る。

こうして、二人はグランドラインに入ったのであった。

■

二人がグランドラインに入り、目にしたのは海ではなかった。山ほどの大きさをもつ鯨が船の針路を塞いでいたのだ。

「このままいくとぶつかるわ……！」

「縁起でもない！ 何かにつかまってる……！」

鯨と船の距離は1kmはあった。

しかしながら、鯨の横に生じる僅かな隙間を、避けるという舵の取り方はできなかった。

故に、アルディは能力を発動させる。

## フリージー 重力操作

自身を中心に円を展開。

円は船を容易に包み込む。

その円の範囲が重力操作を受ける範囲。

アルデイの能力は船を宙に浮かべることを可能にしたのであった。

■

山ほどの大きな鯨は西の海に生息するアイランドクジラと呼ばれる種類で、ラブーンという名がつけられていた。

その鯨がレッドラインに向かって吼えていたわけだが、この鯨の体がアルデイ達の進路を防いだのであった。

アルデイは能力を使い、船を擬似的に宙に浮かした。

そして、左手の高さ2・30mある岩壁を通り越し、船を壊すことなく海に着水することに成功したのであった。

しかしながら、船という巨大な物体を数秒とはいえ宙に浮かす自然法則を無視した事象を起こす代償は少なくなかった。

僅か数秒間の能力の使用に、アルディは潜在オーラの6割以上を能力の発動として消費したのであった。

「ハア……ハアっ」

「大丈夫？　すごい汗だわ……！？」

甲板の上で、アルディは四つんばいになりながら、荒い息を吐いていた。

全身からは汗が噴出している。

いかなる時も落ち着いた振る舞いをしてきたアルディとは全く異なる姿にロビンが心配した様子で近づく。

「問題は無いさ、鯨を見たら汗を噴出す病とかじゃないから心配するな」

「……そう」

ロビンは体内から大量に出た汗を補うための水と、汗を拭くためのタオルを船内から能力を使用して、手元に持ってきた。

それらを手渡しながら、尋ねる。

「では、その汗は船が浮いたことと関係があると考えていいのね？」

「……まあな。さっきのは俺の能力だ」

アルディがロビンに念能力を隠していたのは、念能力は本来秘匿されるべきという考えと、自身の能力が他人に知られることの恐ろしさを十分理解していたからだ。

「あなたの能力は凄いのね。船を浮かせてしまっんですもの」

賞賛の意味を込めた言葉というよりも、どうして能力のことを話してくれなかったのか、そのことを責める意味を込めた言葉であった。

アルディはその意味を悟り、先ほどと違う汗をかく。

どう彼女に話せば、穏便にすませられるだろうか、と考えていた時であった。

彼のカンがそれを感じたのは。

■

アルデイが念を使用せずに、何かに気付いた。  
その気配は灯台がある方向から感じられた。

“凝”を行いながらそちらの方を見る。

アルデイが警戒した様子で、灯台の方向を見ていたためロビンもその方向を見る。

岩壁と船との距離は50m以上あったが、アルデイの警戒を緩める要因にはならなかった。

灯台の横にはレンガ造りの小屋があり、家の扉がゆっくりと開いた。扉からは花びらのような髪を生やした老人が、新聞紙を持ってゆっくりと出てきたのであった。

老人は二人が乗っている船を一瞥する。

そして木製のテーブルと椅子が備え付けられた場所まで、ゆっくりと歩き……。

座って、新聞を読み始めた。

「こちらには興味がないみたいね……」

肩透かしをくらったロビンが言う。

が、アルディは老人を見たときに驚愕していた。

老人の体からはオーラが出ていたからだ。

## 汗（後書き）

少し短くなりましたが、次の話の内容上、2つに区切らせて頂きました。

いつも読んでくださる皆様ありがとうございます。  
感想・評価の方、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4332v/>

---

ブラックリストハンターとオハラが悪魔

2011年8月20日01時34分発行